第一義の道

島木健作

青空文庫

「もう何時かしら」と眼ざめた瞬間におちかは思つた。思はずはつとした氣持で、頭を上げて雨戸の方を見た。戸の外はまだひつそりとして、隙間のどの一つからも白んだ向うはのぞかれはしない。安心して、寢返りを打つたが、まだどこか心の焦點のきまらぬ氣持で眼をしばたたいてゐると、闇のなかに浮動する樟腦の匂ひがかすかに動いた部屋の空氣につれてほのかに鼻さきににほうて來た。すると急にさめてきた心にどきんと胸をつく強さで今日といふ一日の重さが感じられた。血がすーつと顏から引いて、動悸がしだいにたかまつて來た。おちかは布團をずり下げ、上半身を乘り出して手をのばして枕もとをさぐつてみた。ゆうべ寢るとき取り揃へておいた衣類やその他身のまはりのものがそのままそこにある。それらを一つ一つさぐつてみてゐるうちに、昨夜夜ふけてひとり起き、羽織の乳に紐を通しなどしたとき胸にわいた思ひが、今またしみじみとしたものとして生きかへつて來るのだつた。その思ひにあたためられ、六十を越えた齡にあけがたはもうかなりに冷えをおぼえるこのごろの季節なのが、今朝はさほどの苦にはならなかつた。手足をのばし、おちかは少時うつとりとしてゐた。が、すぐに小きざみにからだがふるひ出し、ふるひは容易にとまらなかつた。根のゆるんだ齒がかたかたと音をたてて鳴つた。汗さへ流れでて來るやうであつた。ふたたび寢がへりをうち、のばしてゐた手足をまるめて何かだいじなものを抱くやうな氣持と姿勢でおちかはぢつとたへてゐるのであつたが、それはなにも寒さからではなかつた。間もなく時計が五時をうつた。

おちかは掻卷のまま寢床の上に起き上つた。肩をすぼめ、首を垂れ、兩手を胸のあたりで組むやうにして坐つた。自然に祈りの心になつた。はずんで來る呼吸のみだれをととのへることができなかつた。たうとうその日が來た、と、さうせねば一度つかみかけたものも手からずり落ちてしまひさうなあやふやな氣持で、おちかは自分に言つて見た。なんといふ長い五年の月日であつたことだらう！今となつてふりかへつてみれば、ただもうわるい夢を見つづけて來たやうなものだが、五年前のその日はるかに今日の日をのぞみみたときには、考へてみただけでもう精魂の盡きはてるおもひがするのであつた。

「なあに、過ぎ去つてみれば短いもの、案じるほどのことはありやしない、よしんば案じてみたところでなるやうにしきやならないんだから。」

からくもふるへる聲で自分自身に言つた。そばかすのある顏は青ざめ、眼はどこかあらぬ方を眺めてゐるやうであつた。今までとても世のいざこざのすべてをその考へ一つで押し切つて來た六十年の老の經驗が、この際も一應はおちかの氣をしやんと立てなほしたかに見えたのであつたが、さてその日から實際にはじまつた一日一日は信じがたいほどの重さでのしかかつて來た。一日明ければもうその瞬間から明日の日を待ちのぞんでゐるのであつた。仕事のあひまには一日に何度も暗がりにしやがんで息をつき、その都度肩や腰のあたりからからだの精が拔けおちて行くやうな氣持だつた。昭和××年十月××日と、檜のうす板に書いて、自分の居間になつてゐる四疊半の神棚に上げ、朝夕それを見あげるごとに針を持つ手もふるへがちな此頃の身の衰へをおもつた。はたしてその日まで、向うは無事でもこつちはどうであらうとおちかは心細がつた。しかし人に向

つてはかたくななほどにぷつつり口をつぐみ、慰めの言葉をもらつても一と通りの挨拶で受けるだけで、その挨拶にも顔のいろにもつつぱねたものが感じられた。いろいろとかきくどき、うはずつた聲でいふだらうと豫想して來た人達にはなにかもの足らぬ感じを與へたのである。

「なんて情のこはい婆さんだらう。なるほどね、息子もあれに似たんだね、業さ、業たかりだよ。」

人々はそつと陰口をたたいた。自分には直接かかはりのない人間の不幸を、一定の距離をおいて眺め、やさしい言葉をかけることのなかに感じる殘酷な喜びを裏切られた憎らしさがそこにはこめられてゐた。おちかは人の眼のとげを感じながら、だまつて目立たぬやうに生きて行つた。さうして自分ひとりでぢつとたへて來た心の重しは、五年後の今日、今はかくしきれぬものとなつてあらはに肉體に刻み殘されてゐる。痩せるだけ痩せ、顔は小さくなり、眼だけがこれを限りと一つものにしがみつく必死な光を放つてゐた。

おちかは立ち上つて着ものを着かへた。坐つた當初から心の隅にきざし、しだいに大きくひろがつて來た不安にもうぢつとしてゐることができなかつた。この手にたしかに握れると約束はされながら、そのものを現實にしかと握つてみないうちは、その約束の時が近づけば近づくほどかへつて益々大きなものになつて行くあの不安である。おもひもかけない何らかの障害が、今、渇望の滿されようといふその瞬間にふいにどこからか割り込んで來てすべてをぶちこはしにしてしまふ、いためつけられ通しの六十年の過去にさういふ事實は一再にとどまらなかつた。その暗いかげにおちかはおびえた。

おちかは雨戸を一枚だけあけ、空をうかがはうとからだをのり出した。さつと音もなく繁吹きが來て顔をぬらした。あ、雨か、と今はじめて氣づいた。うつすらと向うから白みかけて來る空のなかに細い雨脚がみだれてゐる。

おちかはそつと廊下を行き、臺所へ來て、ことことひそかな音をさせながら朝の支度にとりかかつた。

「ねえさん、もうそんな時間なの。」

茶の間につづく座敷に寢てゐるひさがねむさうな聲でいつた。

「さあ、何時だやら、眼がさめたんですぐに起きてきたんだけれど。」

何氣ないふうをよそほつて言つた。やつぱしその日の朝となればおちついて寢ても居れんぢやないか、平氣らしく構へてゐるのはうはべばかしさ、とあざわらひの氣持で心の底をのぞかうとしてゐるものたちがゐる。

夜明けから降りだしたらしい雨は小止みなしに、晝すぎからは風さへ出て來た。壁は濕氣を吸ひ込み、火鉢の欲しいやうな寒さは、腰の神經痛にひとしほこたへしんしんと疼き出すのであつた。この部屋は狹いせゐかあつたかだね、と玄關に近い三疊の小女の部屋にひきこもり、小女相手におちかが雜布を刺してゐるのにはわけがあつた。新市域にはいつてから近年この界隈にはめつきり家がふえ、驛につづく表の街道は人通りも增し、午後になると圓タクがひつきりなしに往き來した。姿は見えないが、その一つが家の前近くまるとき、この小さな部屋にゐてはつきりそれとわかるのである。その度ごとにおちかはどきんとし、からだぢゆうの神經を一つにして、聽耳を立てるのだ。くぐりを開け、砂利を踏んで來る足音をとらへようと焦るのである。そつと音のせぬやうに廊下へ來て、襖を半ば

あけ、のぞきこんで、そんなおちかを眼で弄ぶやうにじろじろ見ながらひさが言つた。

「さうさう、今日は順吉さんが歸つて來る日だつたのねえ。今氣がついた。停車場まで迎ひに行つてあげたらいいに。」

通りしなにふと氣づいて襖をあけたらしくつくろつてはゐるが、實はわくわくする興味をおさへかねてわざとのぞきに來たことをその眼は語つてゐる。たつた一人の甥の喜びの日を忘れてゐたといふ、それだけでもう自分の薄情をさらけだしてゐる、事實はしかし一ヶ月も前からおちかとはちがつた關心から今日の日のことを考へ、それにのみこだはつて來たやうなひさであつた。

「子供ぢやないんだし、それに着く時間もわからないしするから。」

ぼそぼそと低く口のなかで答へた。針を持つ手の細かなふるひが剥ぐやうな意地わるな眼に映りはしないかとおそれるのだ。だらしなくスリツパをひきずるやうにして足音が遠ざかると、家ぢゆうの誰彼をつかまへて、電報一本うたぬ息子も息子だし、迎ひに行かうともしない親も親だと陰口をきいてゐるひさが眼に見えるやうである。ときどき空に眼をやり、街路の音に氣を持ちつづけ、つひに日暮れちかくなつて車が一臺この家の塀の曲り角に近くとまつた。たしかにそれとすぐに胸にぢかに來た豫感があつた。おちかは急いで立つて、街路がそこからまつすぐ見通せる玄關横の應接間にはいつて窓から見た。行李を地におろし、こつちに背を見せながら若い男が金を拂つてゐる。季節にはまだ早いはねあげたとんびの袖の間からは、あきらかに自分が手がけて縫つた着物の柄がのぞかれた。おちかは部屋を出ると、臺所にかけてあつたはたきと箒を手にして二階へ上つて行つた。もう夕方の掃除の時間が來たと、なにげなく見せかけるふうではあつたが、胸はわれるやうに早鐘をうつてゐた。しばらくすると下の方に、廊下を往き來する足音と、ひさに女中、それに男の聲がまじつて話すこゑがきこえた。バタバタと子供が走つてくる音がすると、「花子や、をばさんにね、順吉さんが歸つたからすぐにいらつしやいつて、」と、ひさがいつてゐる。

「をばさん、どこ?」「さあ、お二階でお掃除かしら。」

すぐにそこの階段の中程に足をかけ、くりかへす花子のこゑがきこえて來た。

「をばさん、をばさん、順吉さんがお歸つたからすぐにいらつしやいつて。」

塵もないそこらあたりにはそはそはと箒をあててゐたおちかは、あい、今行きますよ、と高く答へながらそのこゑははつきりふるへてゐた。

下の座敷へ下りてみると、順吉はそこにきちんと膝を重ね、叔父夫婦と向ひ合つて坐つてゐた。後ろ向きにやや斜に坐つてゐる順吉の、のばしかけてまだいくらにもならない髪の毛が子供のそれのやうにぽやぽやと細く柔らかに、色はうすく赤味がさし、榮養のわるい感じで、額が目立つてぐつと禿げあがつてゐるのが、まつさきにおちかの眼をとらへた。足音に母親と知ると、順吉は顔をかへしてまつすぐにこつちを見た。正面からおちかの顔にじつと見入り、しつかとすわつたその眼つきはおちかがかねて心のどこか奥の方で豫想してゐたものよりは、はるかに強いものであつた。こはばつた表情で受けとめ、ふたたび視線のそれるまでの瞬間の激情におちかはからくも踏みこたへたのである。

「御挨拶はすんだのだね。」

おちかのはじめての言葉であつた。順吉は靜かにうなづいた。

「おまへ、ちよつと失禮をして着ものを着かへたら……」

隅の方に坐つて、臆病さうにおちかはまた言つた。同時に、これがあの五年のあひだ夢寐にも忘れることなく待つてゐたその瞬間かとおもへば嘘のやうな氣もし、崩をれて行く心の疲れをどうすることもできなかつた。

歸つて來た順吉の心をおちかはどうにもはかりかねるのであつた。その夜、二人だけの四疊半にはいり、向ひ合つて坐ると、順吉は母の前に手をついて言つた。

「ほんとうにお母さん、長いあひだいろいろ御心配をおかけして、……」

言葉はそこでぷつつりときれ彼はおもはずこゑをのんだ。しばらくしてから、身體はこのごろどうですか、神經痛はやつぱり出ますか、とさういふことをやさしくいたはるやうにきいた。その言葉にこもるしみじみとしたものに感じておちかは見失つたわが子をふたたびこの手につかんだとおもつた。が、さう思つた次の瞬間におちかはもう不安であつた。五年のあひだの恐ろしい生活に少しも挫けて見えぬはげしい意地の張りがおもひもかけず順吉の眉目にひらめくからである。順吉の無事の歸宅を祝ふ意味で、かたばかりの祝ひの膳にその晩一家ぢゆうのものがついたとき、思つたより順さんは元氣に見えるといひ、ひさはしきりにはしやいで見せた。叔父の奎吾もその言葉を受けて大きくうなづき、近しくしてゐる府會議員の某が、收賄で十ヶ月はいつたときのやつれやうなどは見られたものでなかつた。やはり氣一つのものと見える、などと話した。順吉は尾頭づきの魚の鹽燒に箸をつけて、何年ぶりでたべるかとわらひ、酒はお愛想に一と口受けただけで二人が話しかける言葉を口數すくなく受け流すのだつた。さういふ彼を側に見ながらおちかは人知れずひとり氣をもんだ。奎吾やひさの饒舌はなにも順吉にたいする好意からではない、向ひ合つて坐つてゐる順吉にはきびしい感じで迫つて來るものがあり、ふとした言葉のとぎれにはとくに重々しくのしかかつて二人はその氣づまりにたへないのである。垣をつくつて力んでゐるふうは少しもないのにそこからさきはよせつけぬといふところがあり、うかつに順吉の過去にふれることを阻むものがあつた。請負師といふ家業が持ついやしさに滿ちて人を人とも思はぬ奎吾の面魂をはじきかへして見える順吉を見ることは、うちひしがれ、卑屈になつた彼を見るより何程の喜びであるか知れはしない、だが今後どれほどの期間かここにこのまま世話にならねばならぬ母子（おやこ）の生活をおもへば、たとへ表向きだけでももちつと調子の合せやうもあらうにとおちかは氣兼ねなのである。さういふ順吉がおちかと二人きりでゐるときにもひよいひよい顔をだした。心弱く挫けて母の膝に泣きくづれるやうな子であつたらと、そんな順吉がむしろのぞましいものにおもはれさへするのだ。完全にこの手のうちに戻つたとまだいひ切ることのできぬ氣がする。もう二度とどこへも行かないでおくれ、その言葉がのどまで出ながら、それをぐつと押し戻すものが順吉のどこかにまだ殘つてゐた。

廊下のはづれにある北向きの暗く寒い四疊半にさうして母子二人のわびしい生活がはじまつた。朝、まだうす暗いうちから、廣い庭をなかにはさんだ長い廊下には、さかさになつて雜巾がけをするおちかの姿が見られた。赤兒の拳ほどの小さな白い髷ののつた頭を床板におしつけるやうにして、兩足を八字にぐつとつつぱり、長い廊

下をあちこちと走つた。息を切らし、ぜいぜいいふ音がはなれてゐてもきこえた。一と走り走つては腰をのばし、せつなさうに深く長い息をつくのであつた。たくりあげた裾の下にあらはにのぞかれる兩のふくらはぎには靜脈瘤が青くふくらみ、蛇のやうにまがりくねつてゐた。順吉の留守中のおちかの生活の一切がそこからのぞかれた。その姿からそらした眼を、秋の日のなかに立つ庭の葉鷄頭の燃えるやうなくれなゐにうつし、順吉はしばらくぢつと堪へるのであつた。晝ちかく、仕事が一應片づいて自分の時間ができるとおちかは部屋に歸つて來る。おちかはいそいそとし、順吉が持ち歸つた行李や風呂敷包みをひらくのだつた。二度と使ひみちにならないよれよれの着ものや、洋服や、襟つきのワイシャツや、いくらかの書物や、さういふもののなかにはわづかに人のうはさを通してあれこれと思ひめぐらしてみるにすぎない、別れて音信も不通になつて以來の順吉の生活がぢーつとひそんでゐるやうであつた。それは奥深く、ものおそろしげで、おちかにはつひにうかがひ知ることのできぬものにおもはれた。和服などはおちかが手がけたものがそのままに殘つてゐた。いつまでもおちかはあれこれといぢくりまはしてゐた。かび臭い、ごみ臭い、また饐えたやうなもののにほひは複雑なおもひを誘つてやまなかつた。順吉が歸らぬうちのことであつたならば、それらは胸もつぶれるほどのおそれとかなしみのたねになるだけであつたであらう、今はしかしなつかしさと、なにか珍らしいものでも見るやうな氣持でくりひろげることができるのである。

「なんとまアえらい汚れだこと、どんなに丈夫なものでもかうなつちや。」

事實、ちよつと手でひつぱつただけでぴりぴりと裂ける紙のやうになつた切地なぞがあつた。

「さうでせうね、なにしろわたしがあそこにゐるあひだ、ずーつと役所の庫のなかにはふりこんであつたんだから。」

順吉は行李の底から取出した手紙の束をほどいてたんねんによみかへし、差出人の所書きを手帳にうつしたりするのだつた。時間になるとおちかは二人分のたべものを部屋にはこんだ。おちかは家人におくれて女中と共に食事をする今までのならひであつた。臺所と部屋との間をたべものを持ち運んで往き來するおちかは何かこそこそと人眼をはばかる感じだつた。夜食は順吉だけ、叔父夫妻と共にすることがあつた。夜は、母子は火鉢をなかにはさんで坐り、なんといふことなくいつまでも起きてゐた。

「まア蟋蟀がよく鳴くこと。」と、おちかは眼を細くして言つた。遠いくにの田舍をでも思ひ出してゐるのかも知れなかつた。「ほんとうにこのへんは夜になるとまだまだ田舍ぢや。」

風に木立の騒ぐ音が遠く水の流れのやうに聞えた。

蟲の音や風の吹き落つる音はつい數日前まで彼がそこに朝夕を送つてゐた世界へ順吉の心を連れて行つた。彼は一日に何度かまだ自分がどこにゐるかをも忘れてゐるやうなみじかい時間があつた。ぼんやり夢見てるやうなうつろな心からふと我にかへり、自分が今坐つてゐる部屋の現實のありさまに氣づくとき、「おれは自由だ」と彼は聲に出して自分自身に言つてみずにはゐられなかつた。彼は高く晴れた秋空を見、老衰した母親を見、小ざつぱりとした絣に着かへた自分の姿を鏡に映して見て、現實に我ものとなつた自由をたしかめることができた。しかし彼が長年のあひだ待ちのぞんでゐたほどの大きな喜びはなかつた。心は喜びからは遠い暗さのなかに落ち

こんで行くばかりだつた。制限を附された自由の故にか、それとも出所後の彼が辿らねばならぬ苦難の道の故にであらうか？　歸つて來て二三日のうちは、あけがたの寢床に夢うつつでゐながら、起床の汽笛と點檢の聲を心待ちにしてゐるやうな自分に氣づきおもはず苦笑されるのだつた。眼ざめた瞬間に空の明るさに眼を射られ、あわてて布團を蹴つて起き上つた朝もある。夜聞く蟋蟀の聲や風の騷ぎは今ゐる部屋をそのまま獨房の一つに代へてしまつた。彼が長の年月そのなかに過した獨房は木造の舊式な建物で床が高く、その床下あたりに來て蟲が夜どほし鳴いた。ある日の運動時間に道を行く彼の前を跳ねて行くその蟲の一つを素早く捕へて持ち歸り房内に放つたことがあつた。その夜は鳴かなかつたが、翌日からは一日ぢゆうが日暮れどきのやうに暗い曇り日は晝さへも洗面器や便器の陰などでよく鳴くのであつた。季節々々にそれぞれの心で聞かれた雨風の音も今なほ耳に殘つてゐるやうである。

　時々つひぞ見かけたことのない背廣に口ひげの紳士がたづねて來て順吉に會ふのであつた。二人のことがあり、また一人のことがあつた。

「當分ここにゐるのかね。」

「丈夫さうぢやないか。そのぶんならまだまだどうして。」

「誰も歡迎會をやつてはくれんのかね、昔の同志諸君はどうした。」

　あるときは玄關先にどつかと腰をおろし、あるときはぬつと立ちはだかり、そこへ順吉を呼びだして低いねつとりとした口調でいふのであつた。微笑をさへふくんでゐるのだが、聲を立てては決して笑ふことのない、すばしこく動きながらへんに眼つきのすわつた彼らの姿が門の内にちらちらするごとに、家ぢゆうのものはおちつけなく、いくども立つて來ては樣子をうかがふのだつた。出された茶呑みを口にあてて鋭く奥の方を一瞥した。順吉はふところ手をしたり、帶の間に手をはさんだりしたまま、向ひあつてのつそりと立ち、口數はすくなく、彼らがいふだけのことをいふのを見すますと、だまつて戻つて來るのだつた。順吉は留守のとき彼らが來ることがあり、さういふとき彼らは歸ると見せてかならず裏手へまはり、勝手口から首をつつこみ、手をあげて、ばあさん、ばあさん、と奥の暗がりにゐるおちかを呼んだ。

「どうかね、毎日でかけるのかね。友だちがたづねて來るだらう？　え？　一番このごろに來たのはいつだ。え？　昨日かね、をととひかね。」

　急きこんだ口調でおどすやうにいひ、おちかの顔からは眼をはなさなかつた。深夜けたたましくベルが鳴り、電報かと寢巻姿のまま出て見ると、戸外の暗闇にだまつて彼らがつつ立つてゐることがあつた。彼らが立ち去つたあとの玄關はしんとしづまりかへり、戸じまりしてもどるおちかは毒氣にあたつたもののやうに蒼ざめた。

「あの人たちはどんなお人かね？」

　けれども順吉は、なあに、と事もなげに笑つたきり、ぢつと見つめて待つてゐるおちかをほかの言葉でまぎらし、さうして彼が家をあける日はしだいに多くなつて行くのであつた。朝飯がすむとすぐに出かけ、晩の九時近くやうやく歸つて來ることがあつた。おつ母さん、晩ごはんがまだなんだけれど。と順吉はいひ、さういふときおちかは茶の間の片隅にちやぶ臺を据ゑて支度をしてやりながら、鼠入らずのあけたての音にさへひさに氣兼ねであつた。順吉はしかしさらさらと茶漬の音をさせてゆつくりとうまさうに食ひ、いつの

間にか側の長火鉢の前に來て坐るひさにも氣づかぬふうに見えるのだつた。さういふある夜、順吉が歸つて來たとき、やはり遲く歸つた主人の奎吾が膳につき、酒を酌んでゐるのに逢つた。ひさもおなじ座にあつた。

「まあ、少し話して行きなされ。」と、盃を干して順吉にさし奎吾は言つた。「このごろは毎日どこへおでかけか。」

奎吾は妙に意氣ごみ、いはうとすることの促迫に息をさへはずませてゐた。しかしすぐにはいへず何がこの若造が、と心をはげましてゐるふうであつた。もうかなり醉つてどんよりと坐つた眼の眼尻がたるむと、彼はにはかに態度も言葉の調子もかへて、べつなことをいひだした。

「どうもわしはせはしなくつて、この一週間あまりといふものまるで家におちつくひまもなかつたが、新宿の××屋の建築工事な、あれが今度いよいよわしの手に落ちることにきまつたもんでな。」

何しろ工事の總豫算がこれこれになる仕事なんだからと、片手をあげ、妙な手つきで指を折つてみせたりした。順吉はだまつてつがれた酒を一と口飲み、とぎれがちな二人の間をこつちから話しかけてつながうといふ話題はべつにないのだつた。ただ、大阪の武夫からも君のことを心配して手紙が來てゐた、と聞かされたとき、武夫君はその後どうして居られるか、とたづねて見た。すると奎吾よりもさきに、ひさが、盛り上つた膝をのりだすやうにして二人の話に割つてはいつた。

「うちの武夫もねえ、順さん、學校を出てまだ五年だけど、もうぢき博士になれるつてこつてね。論文とやらをこのあひだだしたが、それがまたねえ、何やら大へんな研究だとかいふことで、」ひさは、花子や、花子やとまだ寢ずにゐる娘を呼んだ。「お座敷のお父さんの机の曳出しからいつぞやの新聞を持つておいで。あの、大阪の兄さんの寫眞がのつてゐる。」

奎吾が受け取つてひろげて見せたその古新聞の社會欄は、醫科大學の外科の助手、野田武夫の劃期的な研究といふものを報道してゐた。癌、結核等の難症と、内分泌との關係を明らかにし、睾丸の移植によつて酸素消費量を増大し、内分泌をさかんならしめて病氣の進行を防ぐといふのがその研究の内容らしかつた。奎吾はうろおぼえの醫學上の術語を交へ、いくどかおなじことを人に語り慣れたことをおもはせるなめらかさで説明し、近いうちに外科學會が開かれるから東京へやつてくる、そのときにはあんたも會へるこつたらうといひ、最後に指導教授の某氏から娘をやらうとの話があり、話は進んでゐるとつけ加へた。「ちつと身分ちがひだとおもはんでもないが、向うからあつた話だし、それに本人は、そりやもとよりどこといつて申し分のない娘御だによつて。」

聞手にまはつてゐたひさは、すぐその言葉のあとを受けついで言つた。

「どうもしかしわたしや上方の娘さんをもともと好かんのさ。あのおまへん言葉を聞くとわたしや胸がむかついて來てね。そりやいいとこの娘さんだし、器量よしぢやあるけどね。寫眞があるから順さんに一つ鑑定してもらひませうかね。」

おさへがたい喜びをかくさうともしない白々しさだつた。障子の陰の臺所ではおちかが奎吾のために料理の次の皿を支度しながら聞いてゐた。祕藏息子の自慢話にはげまされたらしい奎吾は、それに加はる酒のいきほひもあつて、依然むつつりしてゐる順吉を正面に

見据ゑながら、やうやく興奮して來た。がぶつと大きく飲み干し、それをきつかけにはずんだ語勢で、これだけはいつかはいつてやらうと前々から腹にためこんでゐたらしい言葉をたうとう口から吐きだすのだつた。

「時にね、順吉つあん、おまへさんもさ、考へてみりやずゐぶんつまらんことになつたもんぢやないか、ええ？　滿足に行つてりや、おまへさんも今時分は役人か辯護士か銀行員なんぞでさ、それとも理窟好きなおまへさんのこつたから學者にでもなつてるかね、まアなんにしたところで今よりやましだあね、こんなこといつちや失敬だが、母子して人ン家の軒下を借りとる今よりやね、わしは學問がないから理窟はなにも知らん、ただ何事にまれ、はじめつから成り立つ見込のないことには手出しをせんのが利口だといふことだけは知つとる、腕一本脛一本のものが五百や千あつまつておかみに楯ついてみたところで、それがどうなるといふのさ、平の將門、由井正雪の昔から西郷さんの近頃までむほんの勝つたためしがあつたかさ、過激なことはなんによらず天の理にもとるによつて勝てんのだ、人のため人のためとお前さん方はすぐいふが、かういつては失敬だが、自分ひとりの口すぎもようでけんものに人の世話がやけるもんでもあるまい、おまへさんにしたところで今になつてふりかへつて見りや、おつ母さんを泣かせ、親戚に迷惑をかけ、世のなかをせばめたぐらゐがおちだつたぢやないか、わしはなにもおつ母さんの世話がいやでいふんぢやないが、おまへさんももう人のことよりや自分の身の始末を考へてみちやどうだね、主義とかなんとかいへばきれいだが、人間誰しも腹の底をわつてみりやみんな自分本位なものだ、うはべのきれいごとはみんな嘘さ、さうともさ、どんなえらさうな口をきいてゐるものだつてみんなさうさ、人間なにが幸福だとて、はよう嫁もらうて一家をなし、財産も子寶もふえ一家さかえて行くのを見る以上のたのしみなんてものはほかにないもんさ。」

分厚い唇がまくれ、紫の齒莖がむきだしになり、酒燒けに燒けた奎吾の顏には汗がながれてゐた。順吉は微笑した。ああこれか、と餘裕のある腹でおもつた。このあひだぢゆうから何かをいはうとし、妙に意氣ごんではゐるが、正面に顏が合ふとたん挫けてしまふ奎吾であつた。それはこんなことをいはうがためであつたのかと案外な奎吾の弱氣がむしろをかしかつた。順吉にとつては朝夕の挨拶ほどにも耳慣れたものになつてゐるそれらの言葉ではないか。はげしい言葉で一蹴し、あるひは冷笑して受け流すことになれてはゐたが、今は、「ええ、いろいろ御心配をおかけしてすみません、ぼくもいろいろ考へてみますから。」と、無下にははねかへさず、輕くやはらかに受けとめたのである。

自分の部屋に隱れ、灯りもつけず、暗がりのなかに坐つておちかはひとり泣いてゐた。兩手で顏をおほひ、聲は立てずただ涙の溢れるに任せておいた。いふことのよしあしは別として歸つて來て早々の順になにもあんなふうにいはぬでもよからう。またそのぐらゐのことをわきまへぬやうな順でもない、もつといたはつたらどんなものかと、何よりもまづその口惜しさが先に立つたが、もとより悲しみの根ははるかに古く深いのである。死んだ夫の米吉は故郷仙臺から早く北海道に渡り、札幌に住んで、諸官廳や學校に出入りしてかなり手廣く諸工事を請負つてゐた。小柄だつたがどこもかしこもまるい感じで、笑ふと眼がなくなり、器用人で人柄に一種の魅力があつて人々に愛された。が、酒に醉ひ痴れると一時全く狂氣してあら

ゆる暴力がふるはれ、それを取鎭めるにはやはり暴力をもつてするかあるひは放任して時を待つかするのほかはないのだつた。嫁いで來て一週間目にはじめてさういふ夫を知つたとき、おちかはがたりと氣落して臺所の板の間に腰をおとしたまましばらくは立てなかつた。おちかはこれが二度目の結婚であつた。最初嫁いだ先は官吏だつたが、數多い小姑にいびられて一年足らずで不緣になつた。死ぬまでゐるおちかの肚であつたのだが、ある日夫が机の曳出しに入れておいた札が一枚紛失した、それがおちかの持ちもののなかからあらはれたとの理由で出されたのである。舊藩士で開拓使の役人だつた父親は斬つてしまふといつて日本刀を持ちだしたりした。だから再緣の話があり、相手もやはり二度目で先妻の子が四人に姑もゐると聞いたとき、そしてそれが到底避け得ないものであると知つたとき、おちかは生きた心地もなかつた。今はただ一度顏を合したきり、そしてその限りではやさしく頼母しさうに見えた夫一人が力だつた、その夫が今は醉へばおちかの髮の毛を腕にまいて家ぢゆうをひきずりまはしてあるくのである。その時以來おちかは、何事にまれおのれを殺すことがたつた一つの自分の生き方であるとのあきらめに深くも居坐つて生涯動くことがなかつたのである。近く中學校を卒業しようといふ長男を頭に四人の子供らも、さういふ父親の濁つた血を受けてゐるせゐであらうか、どれもこれも意志の弱い、人間の享樂的な生活に向つてだけ早く眼がひらけるといつたやうな子供らだつた。絶えず何かにつけねらはれてでもゐるやうにおどおどしながら暮して來たおちかはその年の秋みごもるとあらたな恐怖におそはれた。やがて生れようとする自分の子供を父親とかの四人にひきくらべて考へるのである。おちかの再婚とほとんど前後しておちかとは十以上ちがふ妹のひさが、米吉の下に使はれてゐた奎吾に嫁いだ。後年彼らは米吉の世話で上京し、仕事の上で獨立したのだつた。

六年經つて夫が腦溢血でぽつくり死んだとき、おちかは涙も出ず、かへつてがつかりと虛脫したやうな安心をおぼえた。一時に疲れがでて一週間ほども寢こんだ。急に年をとつたことを感じた。腹をいためぬ子供たちはみなもう大きかつたので、一人兒の順吉を連れて分家した。米吉はどれだけのものも殘しては行かず、おちかへの分け前はあらたに一家を構へると同時に消え去つてしまつたほどのもので、その日からすぐにも附合ひだけは廣かつた亡夫の顏を利用して針仕事の口などをさがしまはらねばならなかつたが、それでもおちかは長年もとめあぐんだものを順吉とただ二人きりの生活のなかにはじめてしかとつかみ得た心地がしたのである。順吉が小學校に通ふやうになつては、荒い縞の、がはがはした小倉の袴の紐をしめてやる朝々のおちかの手には一種の感慨がこめられてゐた。子供もまた親のさういふ氣持を受けてか順吉ははじめから出來のいい子であつた。後半生の生甲斐を順吉の將來にだけ見出してゐたのはもとより最初からではあつたが、さういふ順吉を見て希望がしだいに現實に近づきつつあるとおちかが感じたのは當然であらう。妹夫婦の武夫についての自慢話を耳にするごとに、そのむかしおなじ高等學校をおなじ年に受驗し、順吉ははいつたが、武夫はおちて一年遊ばねばならなかつた事實をかなしい口惜しさでおもひおこすのだ。武夫も亦妹夫婦にとつてはただ一人の男の子であつた。双方の一人兒をなかにはさんで、親たち同士が、互ひに競ひ合ふかのやうな心の狀態におかれることははじめから避け得なかつた。ひさが時々歸道し、おちかに會ふごとに二人の感情はからみ合つた。同じ受驗の時

以後それはますます露骨なものになつて行つた。おちかが順吉の學費のためにいくばくかの補助を願ひ出、ひさがそれをにべもなく蹴つた、昔のことを恩に着せようつてのがわたしやいやなのさ、とひさは傍人に語つてあるいたが、その時以來、おちかの順吉への期待にはあらたな情が加はつたのである。後年順吉は學業を中途で放擲し、他國に行つて民衆のなかに入り法にもふれるやうなことになつたが、その事實をおちかは長い間知らなかつた、そのおちかへ、どこで手に入れたかおひさは順吉らの事件のいきさつを寫眞入りで巨細に報道した地方新聞の切抜きをわざわざ送つてやつた、簡單な見舞の手紙がそれには添へられてゐたが、それ御覽な、と手を叩いてゐるやうなひさを言葉の陰に感じたとしてもそれはあながちに不幸なおちかの邪推とばかりはいへなかつたであらう。よるべを失つたおちかは間もなくひさの許に身をおくにいたつたが、そこでは決して姉として迎へられはしなかつた。今まで二人ゐた女中は一人に減つた。奎吾も五十を越えて仕事の上にもあぶらが乘り、財も出來、ひさは更年期の女らしく肥えふとつて何事によらずあけすけものをいひ、けばけばした成り上りものらしいいやらしさが家ぢゆうには充ちてゐた。武夫の話をするときは必らず順吉を引合に出しておちかの胸をゑぐつた。今なほ米吉に顎で使はれた昔は忘れがたく、みじめなおちかを見ることでひそかに成り上りものの快味を味はつてゐるものとおもはれる。

順吉が高等學校へはいるやうになつて、母子ははじめて遠くはなればなれに暮した。ときどき歸つて來る順吉の顔はその度ごとに思慮深い大人らしさを增し、するどくひきしまつて見えた。しかしいつも不機嫌さうに蒼ざめ、聲を立ててわらふこともないのが氣になつた。ちやうどさういふ年頃ではあるが、年のせゐとのみはいへないものがあり、眼に見えない氣質の病が感じられ、ふとあることに思ひあたつておちかは顏いろをかへた。死んだ夫の血を思ひ起したのである。極端な父の陽性と子の陰性とその正反對なものの間に相通じるものが感じられた。母のこのおそれはあたつてゐたといへる、しかしそればかりではなかつた。母からは月々わづかな小遣ひを受けるだけで、順吉は自活し、そのために強ひられる卑屈な若さのゆゑに一入こたへた。さういふ彼の實生活を通して來る社會の重さがあり、一般に當時の青年がその下に喘がねばならなかつた時代の壓力があつた。青春は失はれるか、歪められるかしてゐた。當然の經過として一つの思想が進路において順吉をとらへた。それは彼を救つた。會ふごとに彼の相貌に深さを增して行つた神經的な鋭さは、それらすべてのものの複合の所産であつた。

しだいに音信がとだえがちになり、歸るべき夏にも歸らなくなつた。母はおそれながらも子を疑はず、時は流れ、今は學業の終りの日が待たれるばかりとなつた。ある日おちかはひさから一通の手紙を受けとつた。

おちかは漠然と何かが起つたのを感じた。彼女はしかし新聞が讀めなかつた。當時のおちかはある會社の若い獨身社員たちの合宿所の飯炊きをしてゐた。すでに老年の底翳（そこひ）が眼に來、針めどは見えず、手はふるへて二十年の活計を支へて來た仕事とも別れたのだつた。おちかは社員の一人に新聞の切抜きと手紙とを示し、讀んでくれといつてたのんだ。彼はけげんな面持でそれを手にし、おちかの顏と見くらべた。彼は讀んだ。愕然として再びおちかの顏をぬすむやうに見た。事の重大さを知り、どうおちかに傳へるべきかについて迷

つた。しかし彼はどうにかしてそれを傳へた。おちかは口のなかで何かぶつくさいひ、頭を垂れ、足をひきずるやうにして自分の居間へ歸つて行つた。

　周圍の壁に押しつぶされさうな息づまる感じから、窓により眼を遠くへやつて見たが、ものの遠近が一つであつた。しばらく見てゐるうちに眼の前が曇つて來た。夜にはいつてからさきの社員が心配してそつとおちかの居間をのぞいてみると、おちかは部屋の隅にぴつたり壁に向ひ合つて坐り、人には聞えぬほどの低さで、しきりに自分自身に語りつづけてゐた。それは孤獨な彼女が心の惑亂からおのれを救ふたつた一つの方法であつた。長年の獨り暮しに思ひ屈した時にはしばしばこの方法にたよつた。何かにとりすがる必死な氣持で口から出任せにおのれに向ひかきくどいた。するとそのうち次第に失はれた心のおちつきを取り戻して行くのである。

　翌朝、もう一度新聞の切抜きをとりだし、恐ろしいものをのぞきこむやうに載つてゐる寫眞を見た。髪を亂し、眼鏡などをかけ、顎鬚はまばらに、シヤツのボタンはとれ胸ははだけてゐる、これがあの順吉だと誰がいふのだ、順吉は何をやつたといふのであらう。おちかは心のきまつたふうでまた昨日の社員のところへ出かけて行つた。

「ここからだいぶありますかしら。××縣といふとこは。あなたお出でなすつたことがおありで。」

「ええ、ありますよ。」彼は實は一度も行つたことがなかつた。

「ここからはずゐぶん遠方ですがね。」

「ほう、」とおちかは意氣ごんだ。「そりやどんなところで。寒いところですか、それともあつたかな……。」

「暖かなところですよ。それ、花筵といふのがありませう。あれができるんで名高いところです。」

「東京のこつちですか、それとも向うですか。」

「向うです。」

「大阪よりは。」

「大阪よりも向うなんです。」

「一體どのくらゐ汽車や船に乘つたら行けるんでせう。」

　おちかは叫ぶやうに言つて、それきり考へこんだ。若い社員は地圖を持ち出して來ておちかの前にひろげ、詳しく説明してきかせた。

　おちかはわづかばかり殘つてゐた家財道具を賣り拂ひ、手まはりの品だけを行李一つにまとめて汽車に乘つた。津輕海峽を渡る船の上、雨のそぼ降る海鳴りを闇のなかに聞いたとき、かつて遠い他人のものであるに過ぎなかつた一つの誘惑を自分自身に感じた。電光のひらめきのごとく彼女はそれを感じたが、同時にそうけだつ思ひで、船室に歸つた。飲み食ひ、笑ひさざめいてゐる旅客たちをぢつと見てゐるうち、彼女はおのれのうつつ心がしだいにあやしく亂れ出して行くのを感じた。東京へ行き着いたが、ほかに身をよせるところとてはない、ひさの許に一晩泊つたが、ひさの顔をまともに見ることはできなかつた。次の日の夜一夜の泊りでかへつて疲勞の増したやうなからだでふたたび汽車に乘つた。翌日目的地に着き、そのまた次の日泊つた宿の女中に連れられて町はづれの刑務所に行き、そこで順吉に會ふことができた。彼はふくれてゐて青く、水にふやけた瓜のやうな感じであつた。會つたとて何もいふことなどありはしないのだ。ほんの二言三言話したきりで宿へ歸り、そこで少し泣き、その夜のうちにおちかは歸京の途に着いた。

二人は三年ぶりで會つたのだつた。そして今度は五年待たなければならなかつた。無論その間にも逢ふことはできる。しかしおちかはその後一度も訪ねては行かなかつた。

追ひまはされつづけて來た自分の生涯がやうやく終局に近づきつつあることをおちかは感じてゐた。堪へつづけて來たものだけが持つ頑強さで、盡きさうで盡きないしかし今は最後のものとおもはれる力を呼びさましはげますことができるまでには、かなりの間があつたのである。

追ひつめられて行く自分を一日々々感じながら順吉はやはり毎日のやうに外出し、此頃漸くその消息がわかつた昔の友達の島田に會ふのであつた。はじめ順吉は毎日圖書館に通ひ古い新聞を繰りひろげて見て、自分が留守であつた五年間の社會の現實の動きについてたとへその表面にあらはれたところだけでもできるだけ詳しく知らうと努力した。思ひもかけなかつた、しかし事の本質を考へてみるときはその生起をみぢんも不思議とはしない事象の次から次への壯大な展開は完全に彼を壓倒した。歷史は流れてゐる！　彼は血潮のわき立つ實感をもつてそれを感じた。刺戟はしかし餘りにも強かつた。眼と神經がすぐに疲れた。彼はもみくちやにされ、興奮し、醉つぱらつたものの足どりで家へ歸るのだつた。圖書館通ひが一と句切りつくと學生時代の友人や、自由になつてゐる昔の仲間たちを訪ねて街から街をあるいた。居所が不明であつたり、相手の今日の社會的地位が全く思ひがけないもので自分との間に餘りにも大きなかけ離れが感じられたりして、會へないものが多かつた。それでも彼らのうちの四人のものが、順吉の無事出所を知つて、ある一夜、彼を招んでくれた。親戚の一人がそこの幹部である新聞社の記者をしてゐる山下がゐた。當時としては意想外な株屋に轉向し持つて生れた機敏な才能を生かしてもうかなり儲けてゐると噂されてゐる田邊がゐた。小説書きになつた高山がゐた。歷史研究家の杉村がゐた。

「日ソはいよいよやるらしいね、ほとんど確實だそうだ。」と山下が言つた。食事もすみ、順吉を中心としての話題も盡きたあとであつた。「おれや、今日も出先で聞いたんだがね。」

重大なことを語り出すらしい氣取りを見せ、彼はみんなの注意をひきつけながらしやべつた。職業柄他人の容易に知り得ない新しい内外の情勢の聞込みについてしやべることに充分な愉快を感じてゐるらしかつた。最近の要人の意嚮とその動きとについて彼は語るのであつた。自分だけが知つてゐるといふ得意な氣持は、話を誇張にみちびいていつた。聞き手の受け取り方ひとつによつては、それらは有益でないことはなかつた。だが、話し手である山下自身は、それらのすべての動きを主體的にどうつかんでゐるのであるか？　それらすべての動きのなかに、彼自身の生き方の態度はどのやうに設定されてゐるのであるか？　その二つはバラバラなものであつていいのか？　よく動く彼の口をいつまでも見つめてゐても、順吉が昔の友から聞きたいと思ふことは、つひに聞くことができなかつた。山下はあちこちをこまめにわたりあるいて、かきあつめた新しい情報をまたあちこちでくりかへし放送してあるくのだらう。よく切れる有能な記者と評判されること、今の彼の生き甲斐とはさういふものであるのだらう。さうだ、もはや彼はただの記者以外の何ものでもない。彼の昔の經驗は、情報をかきあつめたり、それの解釋にちよつぴり鹽をきかせたりすることのなかに生かされて、無駄ではな

かつた、といふことになる。ふりかへつてみて、悔みなき人生行路と思ひこむことができる。

「ブルジヨアの機構といふ奴あ考へてみりやみるほど巧妙にできてるね。基礎もギツチリしてるよ。はたでみるやうなあまいもんぢやない。なかへとびこんでみてはじめてわかるんだ。」と、株屋の田邊がいつた。「實際おれたちは人間の生活といふものについては何も知らなかつたからなア。生活の複雜さには實際おどろくね。ちよつとした一見じつにつまらなく見える日常生活の習慣なんてものも、決して單なる殘滓ではなくて、今日の社會關係、人間關係の上にじつに大きな意味をもつて生きてるんだものね。さういふことを無視しては民衆なんかついて來んさ。昔の大膽不敵さを思ふと空恐ろしくなるよ。つくづく現實て奴は一筋繩ぢやいかん曲者だね。」

彼はいかにも實際家らしい、生活のおとならしいおちつきを示した。言葉そのものはいかにももつともであるといふのほかないものである。さういふことをいふにふさはしく、彼は肥えふとり、あぶらぎつてゐた。昔の青白い神經質なおもかげなどはどこにもなかつた。彼はどこかふてぶてしく居坐つたといふ感じであつた。

「まア自分の能力に應じて出來るだけの仕事をやつて行くんだね、こんな時代には。」と、今度は小説家の高山がいつた。

自己による才能の再發見、あるひはそれへの復歸は、彼自身にとつては喜ぶべきことであらう。しかしながら、高山のみならず多くの青年は、彼等の稟質と才能とについての自覺を缺いたものばかりであつたであらうか？　「汝自身を知れ」との訓言の前に、ただ頭を垂れなければならぬ者たちばかりであつたであらうか？　彼らに人なみすぐれた自覺はあつた。しかも自己を知り、個的人間の完成のための智慧の光りをうちにみがくことをもはや最上のことと思へぬにいたつたこと、所詮かくのごときものと觀念したおのれにさへも反逆し、ある意味では破滅の道と知りながら、高く飛躍し、生命を燃燒させずにはゐられなかつたこと、そこにこそ青年の苦惱があり時代の悲劇があつた。高山などもその苦惱をなやんだ一人である。今の彼には、本來居つくべきところへ歸つたといふ安らかさが見える。その安らかさを皮肉な眼で見るのではない。しかしその安らかさはどのやうにして得られたものであるか？　筆をとるといふ仕事を、自分の過去とのつながりにおいて、どのやうに考へてゐるのであらう。

「××派の川島が又ぞろ小作料の性質について雜誌に論文を書いてね。もちろん封建的遺制の問題なんだ。おんなじ問題を何回も厄介だがね、おれや論爭を買つて出たよ。今度は少し本腰でやるつもりだ。」最後に、經濟史家で理論家の杉村がいつた。

厄介とか本腰とかいつたとて、それらはただ會話のはずみでひよいひよい出てくる言葉にすぎない。一つ一つの言葉ではなく、彼の話全體にそんなところがあつた。反駁文章を書いて發表するといふことが彼にはたのしいらしい。さういふ文章を書いて發表したといふことと書かれた内容に對して、彼は、果して身をもつて責任を負はうとするものであるのだらうか？　反駁される川島も、反駁する杉村も、日常の生活意識や行動の上ではなんのちがひがあるのではなく、あらそひはただ印刷された紙の上のことではないのか？

順吉は杉村にだけは彼の留守中に起つた政治的な問題で疑問に思はれることを二三訊いてみた。人前で意見を述べられぬやうな問題ではない筈だつたが、彼は曖昧にいつて答へなかつた。答へ得なか

つたのかも知れないし、答へることを避けたのかも知れなかつた。ただ自分に都合のわるいある種の問題について答へを拒む時には、そんな質問をこんなとこでするのは非常識だ、といふ顔をするのがならはしらしいといふことを順吉ははじめて知つた。集りは散つてみんなにわかれ、順吉は電車に乗り、下りて家の方へひとり歩いて行つた。

　複雑な感情にゆすぶられながら彼はあるいて行つた。彼は笑つた。侮蔑や情なさや、また悲しさからも來る笑ひであつた。眞黒にくすぶつた怒りと、言ひ知れぬ寂しさとを同時に感じた。昔を思へ、なんといふ今のおまへらの卑俗さ。それにつけても彼等をかくのごときものたらしめた（原文五字缺）が思はれた。四人は順吉に對して漠然たる對立意識を感じ、暗默のうちに協同してゐた。自分等の虚を突かれることをおそれる風でもあつた。彼等は自然饒舌になり、彼等のみ互ひに理解し合ひ、順吉は沈默し、ひとり取り殘された。順吉が沈默せねばならぬやうに仕向けておきながら、彼等はまた逆にその沈默に刺戟され、壓迫されるといふ風であつた。（なに、出て來た當初だけさ、今にお前だつて見てゐるがいい！）彼等は腹のなかではさう思つてゐた。

　株屋になつたつて文士になつたつて學者になつたつて新聞記者になつたつて、そりやいいだらう。おれはひとを最高をもつて律しようなんぞとは思はない。おれ自身恥かしい思ひをして來た人間なんだ。おれはただ、彼等の今日の生活の形がどんなものであらうとも、彼等が自分の過去に對して責任を持つものであることを望むんだ。一人の人間の生の歴史が、發展もしくは沒落の道が、納得のゆくやうにずーつとつながつてゐることを望むんだ。自分自身のものであ りながら、そんな過去があつたか、といふやうな顔がいやなんだ。變るにしても奇想天外な變りやうであつてはならないんだ。彼としてはもうどうにも（原文十三字缺）と思はせるものがなくちやならないんだ。そのあがきのあとを見るとき、おれの心ははじめて慰むんだ。そんなのは甘く、また感傷にすぎぬといふか？　それはさうかもしれぬ。しかしそれが、おれが人にも自分にものぞむところのものだ。その納得させるものが人間の誠實なんだ。……しかし今日逢つた四人などはどうだらう。彼等はあがきもせず、じたばたもしなかつた。當然彼等は傲慢でさへある。人間として墮ちたと自覺してゐるものなんぞゐやしない。こつちの出樣によつては、今でも、「民衆のため」なぞと言つて反撃してくる用意さへあるんだ。……「おれは生きたいんだ、恥を忍んでも生きたいんだ！」さうは口に出してはなかなかいへない。しかしこじつけの理窟はやめてさういふ人間の姿をちつと見つめてゐる奴すらあのなかにはゐやしないんだ……

　順吉は家へ歸つて、もらつた雜誌をひろげ、杉村の論文を讀んでみた。文字が議論の形にならべてあるだけだつた。問題の取り上げ方と打ち込み方とは凡々たるものであつた。何が新しくここから教へられるか。ましてや感動なぞは。反駁したり反駁されたり、平和なながめだつた。論敵は千度でも起き上り小法師のごとく起き上るであらう。そしてそれはかへつて双方にとつて都合のいいことであらう。

　或日、思ひがけなく、古い友達、といふよりは先輩の島田から手紙が來、指定された日時に指定の場所へ出かけて行つて、そこで何年ぶりかで彼を見たのであつた。話してみて、順吉は島田を人間と

して信用した。彼においてはじめて心のたけを話すことのできる古い友達を見た。寂しさに堪へて來た順吉はほんたうに涙を流して喜んだ。喜びはまた更生への希望でもあつた。彼は一途に島田にたよつた。島田によつて新しい出發をはじめることを願つた。彼は再び地方へ行き、農民の間で生活することを願つたのである。島田を見失つたなら、もはや萬事がやむかのやうに、（原文六字缺）しようと焦つて、廣く深く考へる心の餘裕を失つてゐた。島田は危惧を感じなければならなかつた。

彼等は三度四度と會つた。そして最後に、「何も急ぐことはない、もう少し考へてみてはどうか。」と島田は言ひ、今度逢ふまでに一ヶ月の期間をおくことを申し出た。それは老練な島田として當然の處置であつた。彼は順吉の一身上のことをそう簡單には考へなかつたのである。順吉は不平であつたが、結局一ヶ月後の日時と場所とを約し、二人はしばらく別れた。

順吉は血潮の高鳴りを聞き、若々しい情熱のよみがへるのを感じた。うちからこみあげて來る力感と、目標に向つてのたしかな希望とを感じた。自分がなほこのやうな心の狀態に立直りうるといふことが彼によろこびと自信とをあたへた。秋も更けて、巷に號外の鈴音がけたたましく鳴りひびき、その年の五月十五日の事件にたいする法のさばきが報ぜられた。彼が社會を留守にしてゐた間に起つたこの事件についての詳細な報道は、深刻な衝撃を彼に與へた。

しかし順吉のこの一見元氣な恢復したかに見える心身の狀態は決して長くは續かなかつた。彼はしだいに疲れ易くなり、精氣を失つて、救ひがたい無力な感じのなかによろめくやうになつた。最初彼はすべてを肉體的な生理的な原因に結びつけ、事を簡單に考へ、無理にも自分を安心させようとした。長い年月不自然な蟄居生活を送り、社會へ戻つて來た當座は誰しも外貌も精神も思ひのほかに生き生きとして見えるものなのだ。萎え凋んでゐた肉體の諸機能は一時眼ざめ、どんな小さな刺戟にも敏感に反應する。凋れ盡きさうであつた情感の泉は溢れ、青春を取り戻したかにさへ感じられる。見るもの聞くもののすべてが新鮮な刺戟に滿ち、人間世界とはこんなにも壯大な素晴らしいものであつたかと思ふ。人によつては躁狂なほどにはしやぎ、夜を徹してしやべつても疲れることを知らぬのである。しかし間もなく反動が來る。世界が灰色に塗りこめられ、見るもの聞くもの何もかもがただ味氣なく、木石のやうな無感覺狀態におちこんで茫然としてしまふあの反動が。極端から極端へのこの振幅の度の激しさは、すべて神經の異常な疲勞の結果であらう。島田に會つた前後に取り戻した若々しい興奮をも上の一つの場合として片づけてしまふことは順吉の心をみたさなかつた。しかしその後に來た無力感は、何等かほかのものであるのだらうか？

それはたしかに肉體的なものからも來てゐた。冬にはいると窓が北に展いてゐて小さな部屋は晝も暗くて寒かつた。火鉢に粗惡な炭をつぎ、順吉はこもつてゐたが、ぢきにのどや鼻をいため、頭痛になやんだ。咳入るごとに黄色くどろりとした痰が出て單純な風邪とはおもへなかつた。彼は心を引き立てようとし、よく散歩に出、繁華な街を行き、人間のさまざまな營みを見てあるいたが、美しさやいきいきとした喜びは感じられず、醜さと輕蔑したい無意味なものだけが眼についた。飲食し、繁殖する人間の生のいとなみ全體を引つくるめて嫌惡した。彼は場所をかへ、電車にゆられて、遠く河向うの工場地帶までも出かけて行つた。煤煙をうかべて流れる大川の

ほとりや、鉛いろの空に煙を吐く大煙突の立つ塀の近くなどに立つて時を過した。退け時の工場の門をあふれる勞働者の波にもまじつた。勞働者のあつまる飯屋の片隅の席にかけて、彼等の話に耳を傾けもした。さういふことが一體何になるといふのだ？　だが彼はそんなこともして見ずにはゐられなかつたのである。家へ歸つて最後まで手許に殘つたわずかな書物に、深く心をひそめようとした。しかし豫期したものは酬いられなかつた。頭は惡くはない。むしろ冴えてゐる。細かにたたみこんだ論理の筋道を追及することによく堪へ得た。しかしそれは單なる理解にとどまつた。一行々々が冴え返り、ひきつけられたり突きはなされたりするうちに、結局大きな喜びをともなつて心底に消しがたいあとをとどめるといふものではなかつた。なんといふ乾いたこれらの文字どもであることだらう。昔おなじものから受けた感動はどこへ行つたのだらう。

　これが五年間の生活が自分にもたらしたもののすべてか？　彼は全體的な衰弱と、生活力の喪失とを感じた。何によらず欲望が旺で、未知なもの新しいものに心を惹かれ、むさぼるやうに讀み、書き、見、ほんとうに生きてゐると感じ、全身が内からの活力に燃えてゐた時代を彼ははるかな昔のやうに感じた。自分はまだ三十の若さではないか。彼はおのれに向つて齒ぎしりした。さういふ彼を一ヶ月後の島田との約束の日が待つてゐる。順吉はそこでほんとうに全身の不安とおそれとにをののいたのである。

　生活のために闘ひ得るものは、彼自身が積極的な生活者でなければならない。人間の欲望を肯定し、人間の生きる姿を美しと見、民衆の生活を深く愛し得るものでなくてはならない。順吉ははじめて今の自分のありのままの姿を見たやうな氣がした。島田に會ふまでの自分は一體何の力で動いてゐたか？　惰性で動いてゐたともいへるし、頭だけで動いてゐたともいへるし、強制された一つの力にひきずられてゐたともいへる。何れにしてもやむことのできぬうちからの力にうながされての動きではなかつた。決着をむやみに急いでゐるのなども、自信のなさのあらはれであつた。それではみじめなことになつて終るのほかはない。

　そして彼はすでに過去に於て右の經驗者であつた。古傷を癒さうと焦るの餘り、今またおなじ軌道につかうとする。だが古傷は癒されず、新しい傷を得るだけであらう。

　一度おのれの内部に眼を向けるやいなや、彼は假借なくおのれの弱點を摘發した。自分に流れてゐる父祖の血のことを思つた。父と母とから自分が受けついでゐるもののことを思つた。弱點と見られるものもそのもの本來の性質としては弱點でもなんでもなかつた。むしろ美點となり得るものであるかも知れなかつた。ただ、彼が（原文二字缺）の人として立ち現れる瞬間にたちまち否定さるべきものに變るのである。自分でそれと知つて、自分で處理できるものはよかつた、知つてゐながら、自分の意志の遠く彼方にあるものにはだまつて引きずりまはされるのほかはなかつた。

　あらゆる自分をひきとめる力に抗して順吉はしかし島田に會ふ日を忘れなかつた。約束の日に約束の場所に行き、決着をつけなかつたならば、それでおしまひだと彼は思つた。このまま進むことで二度と起てないやうな傷を受けるよりも、もつとだめな人間になつてしまふだらう。あの日彼は自分自身に向つて叩きつけた。「それがどうしたつていふんだ。そりやお前のいふ通りさ。お前はやくざな人間だ、理論とか思想とかいふものだつて何一つものになつてやし

ないんだ、だがそれが一體どうしたつていふんだ？　お前がそんな人間であながら、しかもそんな道をたどらねばならなかつたといふことはなんでもないことなのか？　一體この國には、言葉のほんとうの意味での知識人、思想の人なんていふものがはたしてゐるのか？（原文八行缺）」

しかしその間にも生活は惡くなつて行き、心は荒み、頭も濁つて行くやうであつた。夜毎に裏街のやうなところをほつつきあるくことが多くなつた。ある夜、彼は遂にかつて足を踏み入れたことのない惡い場所へはじめて足を踏み入れた。必ずしも淫蕩な精神に追ひやられての末ではなかつた。むしろ過去と今後の自分を思つた感傷の末であるといつてよかつた。彼は夜更けて家へ歸つて來た。恐ろしい自己嫌惡につかまれて蒼白になり、口も利けなかつた。彼は布團を引つかぶつて寢た。寢つけなくて幻影を描きつづけてゐたが、やがてとろとろと眠りのなかに落ちこんでしまつた……何時間かして彼は眼をさました。母が枕元に坐つてゐる。

おちかは心配さうに順吉の顔をのぞきこんでゐた。手拭ひでそつと額の汗をぬぐつてくれたところであつた。「どうかおしかえ？　たいへん汗をおかきのやうだが。さつきはうなされとつたし。」

順吉はぎよつとして布團を蹴つて起き上つた。

「いや、なんでもないんです、なんだか少し夢を見てたもんだから。」

彼は手拭ひを借りて、脇の下や額の汗をぬぐつた。また横になつたが、ほんとうにわるい夢を見續けてゐる氣持であつた。やがてそのなかからしだいに大きなものになつて迫つて來る一つの像があつた、おちかのそれであつた。

彼はこの時ぐらゐ、母を大きく強く意識したことはなかつた。日々顔を合して暮し、彼は母を考へぬ筈はなかつた。むしろそれは餘りに重々しく彼を壓し、彼は正面から向ふことを避けてゐたのであつた。問題は解決を要求してゐた、彼は臆病からのばしのばししてゐたのだ。最後の土壇場までほつておき、その時が來たとき、「なに、なるようになるさ！」さういつて過ぎることにも彼は慣れてゐた。それで結構、なるやうになる問題もあつた。だが、今彼が當面してゐる問題はそれではすまなかつた。

おちかは八方に氣を兼ねながら生きてゐた。ひつそりと、自分の存在を眼立たぬものにし、その癖この一家内において彼女ほどに忙しく立働いてゐるものはないのだつた。廣い家ぢゆうの朝夕の拭掃除から、臺所から洗濯から、子供の身のまはりの始末から、時には使ひ走りまでやつた。順吉が來てからはとくに息せき切つてゐた。おちかは二人の現在に注がれてゐる世間の眼に射すくめられてゐるばかりではない、一人子の順吉の前でさへ一度は胸で調べて見て、それからいひだすといふうだつた。昔からおちかはさうであつた。物心ついて以來順吉は日蔭者にも似た母の姿以外のものを見たことがない。子供の順吉の最初の記憶に殘る母の不幸はある日の食卓での出來事だつた。四人の異母兄たちが、ずらりと食卓をかこみ、大急ぎでかつこんでゐた。母は給仕をしてゐた。突然になかの一人が、箸を投げ出して叫んだ。

「おつけに蟲がはいつてゐる！」汁の實にまじつて何かの黒い小さな蟲が煮られ、浮んでゐた。子供たちはみな箸を投げ出し、わざとらしくのどをゲーゲーいはせ、賄征伐の寄宿舍の惡童のやうに卓をたたいてもう飯は食はぬといひ出した。母は青くなつた。騒ぎを聞

きつけてまだ寝てゐた父が起きて來て、子供らよりも母を叱りその場はそれでをさまつたが、午後になつて歸つて來た子供らは口々に學校を遲刻したと父に訴へ、父はそんな子供のいふことを取り上げて、母を呼びつけて強く叱つた。母は一言もいはず、物陰で泣いてゐた。子供の順吉も悲しくなつて泣いたが、その小さな心は、父や異母兄(あに)たちへの怒りよりも、母への愛と憎しみとで一ぱいだつた。母にたいするふしぎな感情に苦しんだこれが最初の經驗だつた。順吉の中學三年以後は、母子はしばらくはなればなれに暮した。順吉は玄關番となり、おちかは家政婦として働いてゐたのである。時々順吉は訪ねて行つた、おちかは勝手口から上げ、臺所の隣の二疊に通じ、主人からの貰ひもので今日の日のためにしまつておいたらしいその頃はまだ珍らしかつた洋菓子などを取り出して來るのであつた。自分にたいする愛撫の情をあらはすにさへ遠慮がちな、その癖腹ではどんなにか自分の事ばかり思つてゐるか知れない母を見ると、順吉はいらだたしく不機嫌になり、眼の前の菓子を邪慳におしやつていふのであつた。

「おつかさん、僕はこんな薄荷のはいつたお菓子なんぞ嫌ひさ。」

すると母は世にも情けない顏になつた。その姿がまたたまらないみじめさで胸に迫り、順吉は歸らうと立ち上るのだ。おちかはうしろから追ひすがるやうにし、とめるのだが、きかぬと知るとだまつて手に何かを握らせるのだつた。感觸といつもの例で、それが紙にひねつた五十錢玉二つであることを順吉は知つてゐた。それを押し戻し、時にはそこへおとして歸つて來る彼は、うつたへどころのない、泣くに泣かれぬ氣持であつた。

順吉が囹圄にあつて後もやはりさうだつた。おちかはあとにもさきにもただの一度しか彼を訪ねては來なかつた。その折角の一度の折は、情が迫つて言ひたいことも言へずに歸らなければならなかつた。歸つて行く母の後姿を見て、順吉は入所後はじめて涙をながした。涙を見せまいとしてすぐに編笠をかぶつた。彼は昔のやうに不機嫌な怒つたやうな顏をして母に逢つた。この場におよんでさへ、なほもそんな顏を母に見せる自分に順吉は泣きたいものを感じた。互ひの深い愛情が、素直に、あけひろげに抱き合ふことのできない自分たち親子に彼は宿命を感じた。おちかは二度と會ひに來ず、腹では煮えかへる思ひをしながら息子のことは※氣(おくび)にも出さずに暮して來た。

このみじめな老いた母がいま順吉の前に立つてゐる。過去において棄てねばならぬものはためらふことなく投げ棄てて來た。その度毎に一歩前進したとの感を深くした。身につけてゐるものとてはむろん多くはなかつた。しかし世俗的なものの誘惑は多く、そしてまたそれは取らうとすれば取れぬものではなかつた。いはゆる青春の特權に屬するものとも彼は別れた。より眞實の青春を生きんがために。最大の軛(くびき)である肉親とのわかれは、この前の時には今日ほどのさびしさではその解決を迫りはしなかつた。今はわかれはただの別離ではない。順吉は迷つた。しかし何を今さら迷ふことがあるといふのだ。この問題にたいする彼らの態度を規制する原則といふものは、他の問題におけると同じく直線的な明快さで打ち樹てられてゐる。（原文八行缺）

ある日彼は暮近い銀座の雜沓のなかをあるいてゐた。道路の片隅に老婆がひとり、蜜柑箱樣の箱をおき、その上の臺に三錢五錢の玩具を並べて賣つてゐた。八ツ口に手を入れ空つ風のなかにふるへて

ゐたが、時々おもひだしたやうに玩具の一つを手に取り、口にあててピーと吹いた。そして行人を見送つた。しかし誰も立ちどまる者はない。恐ろしいものを見るおもひで順吉は老婆をふりかへつて見た。

おちかは彼女の過去についてはほとんど語らなかつた。それだけにまた母の不幸な生涯わけても自分の出生以前の母について順吉は想像し、そこで必ずつき當るのは最初の結婚の破綻だつた。それが何もかもの始まりであると一應は思へたが、さうではなく、その先があつた。元藩士の役人の家に生れながらおちかは眼に一丁字なかつた。女子に文字など何するかと彼女の父はいつた。おちかの弟の一人が學業半ばに死んだとき、父はおちかたち女の子等を前において、此奴ら束になつて死んだ佛に代ればよかつた、といつた。憎惡のこもつた聲の響であつた。おちかの生涯の不幸は、その當時にあつて女に生れたといふ出生の事實のなかに、すでに刻印されてゐた。

自分のゆがめられた青春、母の不幸、日々見聞するあらゆる個人の不幸、すべての社會的矛盾、それらをそれの眞實の原因にまで追ひつめて行つて順吉がつきあたるところはつねに一つだ。諸現象は彼に於てつねに一つのものによつて統一された。現實は複雜である。現實は割り切れぬものと人はいふ。しかしながら仔細に見れば割り切れぬと見える現實は實はおのれ自身の姿をもつて見事に割り切つて見せてゐるのだ。ただ何人にもそれが見えるといふわけにはいかぬ。現象の本質的でない意味をあれこれと誇張しはやし立て單純なものまで複雜にし、道に迷つてかへつて喜んでゐる一派を、今日の産物としてあらゆる方面に順吉は見出さねばならなかつた。橫行してゐるものはそれでなければ、土足で踏みにじるやうなやり方で現實を割り切つて見せてゐる一つの勢力だつた。——母の不幸の眞の原因を思ひ、それの除去の道を思へば思ふほど、新しい社會への翅望は、順吉の胸に燃えるのだつた。眞實に母を愛する道にこそ向へ。百萬のおちかとおなじみじめな母の歡喜の日に向つて歩きつづけよ。

事實はしかしその時絶望が彼をとらへた。夜、母と二人一つ部屋にゐて彼は自分にたいしても母にたいしても殘酷な氣持が湧いて來るのをおぼえた。自分の兩手のなかにはいつてしまひさうな小さな母の顏を順吉は見まもつた。彼は自分たち二人が沙漠か大洋のただなかに暴風に吹きさらされてゐるのを感じた。母はもはや長く生きぬであらう。さうして自分たち母子が、時と場所こそちがへ、ともに野垂死の運命にあることを彼はかたく信じた。——するとその瞬間に彼はある一變した心の狀態をおぼえた。激情が全く消えて氷のごとく冷やかなものが浸透して來た。靜かな、まるで構へをなくした心の狀態だつた。すべてを投げ出した、またすべてを受け容れる氣持だつた。同時にそのうつろな心の奧底にかすかながらしんとした力のわくのを感じた。それがたとひ絶望や諦念の所産であらうとも彼は今しばらくそのものに頼るのほかはないのだつた。

年が明けて間もなく、順吉は風邪をひき、床についた。扁桃腺が腫れ熱がかなり高かつた。島田と會ふ約束の日のちやうど三日前の發病であつたから、彼は不安になり湯たんぽを入れ水枕をして靜かに寢てゐた。聲が嗄れ、唾を吐くと齒莖からか咽喉からか血が絲をひいてまじつて出た。次の朝は夜ぢゆう寢られなかつたので兩眼が充血し頭痛がして堪へがたかつた。熱は七度九分以下に下らなかつた。おちかは心配し、醫者を呼ばうといつたが、順吉はとめて何で

もないと思ひ込ませることにつとめてゐた。彼は心に焦りながら、他方には、これでいいとかへつてひそかに安んずる氣が起るのをいなめなかつた。この偶然の病氣にすべてを委ね、問題の解決をも一任し、成行きに任せようとの心である。約束の日約束の場所に現れなかつたならば島田は彼の心が變つたものとしてべつにそれ以上追及しようとはせぬだらう。彼にさう思ひとられることは苦しくはあるが……。

翌る日も熱は高かつた。當日になつても彼はなほ心を決しなかつた。が、約束の時間がいよいよ迫つて來たとき、彼は寢床から靜に起き上つた。

おちかが奥から部屋へ戻つて來たとき、順吉は襟巻で顔のなかばを包み、とんびを着てそこに立つてゐた。おちかはあつけにとられて彼を仰いだ。

「どうかしたの。え？」

「ええ、ちよつと、」聲が嗄がれてゐるのと襟巻で包んでゐるのとでよく聞きとれなかつた。「もうだいぶよくなつたし、それに餘り閉ぢこもつてばかりゐて辛氣くさいんで少しそのへんを散歩して來るんです。」

「何をいふんだえ、お前、」と、さすがにきつい聲だつた。「そんな無茶なことをしてもしもぶり返しでもしようもんなら。たつた今まで寢てゐたといふのに。」自然におちかは出口に立ちふさがるやうな姿勢になつてゐた。

「なに、いいんです。今晩は餘程暖かだし……それに買つて來たい雜誌もあるしするから。」

「雜誌ならあたしが買つてくるから。」

「お母さんになんかわかりやしないつたら。」と邪慳にいひ放つた。「ちやあ、紙に書いてくれればいい。」とおちかは必至だつた。

二人は奥へ氣を兼ねて、ぼそぼそとつぶやくやうにいひながらしばし爭つた。つひに順吉は引止めるおちかの手を拂ふやうにして、廊下の足音を盜むやうにしてしかし急ぎ足で裏口から外へ出て行つた。

外は寒さがきびしかつた。風はなかつたが、歩くと頬に觸れる空氣ははがねの薄刃のやうにぴんぴんとはねかへつて痛かつた。彼は興奮してゐた。出て來るとき母に會つたものか、それとも默つて出て來たものかとしばし迷つてゐた、そこへおちかが來たのだつた。彼は省線のホームに上り、ふと眼が時計に觸れたとき、あわて出さないわけにはいかなかつた。彼は袂をさぐり彼自身のを出して見た。それから見てさへ約束の時間にはもういくらもなかつた。しかもそれは驛の正確なものと照し合すとき五分はおくれてゐるのである。彼は全身がぞくぞくしてきた。戻つて外へ出て圓タクにしようかと考へた。しかしその瞬間上りが驀進して來てホームに入つた。彼は追ひこまれるやうに車のなかへはいつてしまつた。

激しい鼓動を順吉は感じてゐた。高熱から來るものばかりではなかつた。彼は落着きなくそはそはし疾走するから車窓から絶えず外を眺めてゐた。約束の時間にはつひにおくれるだらう…　彼はこのせつぱつまつた時になつてはじめてこの二三日來の、たつた今家を出て來る直前までの自分の躊躇を、恥をもつて思ひ返した。取り返しのつかぬことをしたとおもつた。彼は新宿で降り、圓タクを拾つた。どのくらゐか經つて約束の場所に着いた。みだれた呼吸をととのへてドアを押した。にはかにポツとする温かさである。腰をかけ

曇つた眼鏡を拭いて時計を見た。きつちり十分おくれてゐた。彼は周圍を見まはした。ストーブをかこみ、二三の男が正月らしいおだやかな顔つきで新聞を見てゐる。前には給仕女が彼のいひつけを待つて立つてゐる。島田の姿はどこにもなかつた。

がつたりと氣が挫けると同時に病んでゐるからだの苦しさに氣づいた。全身の血が頭にのぼり、こめかみはふくれあがり、眼に入る事物は幾重にも折り重つて躍つてゐるやうだつた。咽喉がひりつくやうに痛んだ。呼吸が切迫してぢつと腰かけてゐるにも堪へぬほどだつた。上半身を前に折り、眼をつぶつて、彼はしばらく一つことをぢつとおもひつづけてゐた。

出て行く順吉を見送りおちかは茫然としてつつ立つてゐた。息子の行動は不可解な氣狂ひじみたものであつた。しかしかねて漠然と感じおそれてゐたものがいよいよ來たといふ豫感があつた。母子二人の生活の破綻のおそれである。どうしよう、とゐたたまれぬふうであたりを見まはした。誰にでもいい思ひきり心のありたけを訴へたかつた。するとその氣持が思ひがけなく一つの行動をうながすことになつた。いはういはうとこの間から幾度かおもひつめ、つひに今までいひ出せずにゐたことをひさに向つていひだすきつかけが與へられたのである。

三十になる息子を抱へ、いつまでもここにかうして暮してをれるわけのものではなかつた。事實一日一日二人は居づらくなつてゐた。來客があり、順吉の姿をちらと認めて、「ほう、甥御さんで。まあご立派な。何お仕事でいらつしやる」などと語り、奎吾が、いや、と言葉を濁してゐるのを襖のかげで聞くのは苦痛であつた。薄氣味のわるい口髭の紳士が順吉を訪ねた日にはひさの機嫌は眼に見えてわるく、あたりのものに當りちらした。「警察なんぞに用のない家だよ。たかが刑事ふぜいにあんな顔をされるとおもふとわたしや癪でさ。」それはみんな誰のせゐだといふのである。つい四五日前にもひさが何かの拍子に二人の居間に足を踏み入れ、「この部屋も壁が汚なくなつたこと」といひ、「こんな部屋でもねえ、景氣のいい時には十圓の上にも借手があつたものさ」と何やら思はせぶりにいふのであつた。さういふ親の氣持はそのまま敏感な子供につたはり、順吉が新しい下駄一足買つて履いても、今年十になる娘の花子に、「をぢさんその下駄はうちのおかあさんに買つていただいたのでせう。をぢさんはいつまでおうちにゐるつもり。」とあけすけいはせるほどであつた。そんな子を目の前で見てゐて親はべつにたしなめもせず、かへつてこまちやくれた子を利發だとするらしい眼つきになるのであつた。たとへそんなことがなくても一日も早くこの家の軒の下は出たかつた。どんな襤褸家でもいい親子二人の生活を作りたかつた。今のおちかの願ひはただその一筋道にかかつてゐた。それにしても肝腎の順吉は一體どんな考へでゐるのであらうか。しかし動くにしても先立つものは多少まとまつた金であつた。その成算が立つてからでなくては順吉には何もいひだせない氣がした。幾度か今度こそはと思ひ詰め、ひさを見るのもそのためだが、いざ面が向き合つたとなるとなかなかに言ひ出せなかつた。

おちかはひさが座敷にゐるのを知つて廊下を行き、そこの障子をあけた。——「をばさん、ちよつと。」

おちかはさういふ呼び方でひさを呼び慣らされてゐた。

「ええ?」ひさは顔もあげず、手も休めなかつた。ひさは晝に外出

し、その時の着物を折り疊んでゐた。

「ちよつと話があるんだけれど。」としばらくしてまた言つた。

「話？」といつてひさは顔をあげた。この齢になつてまだ白粉を塗つてゐる、それが剥げて、明りをまともに受けてゐる小鼻のあたりに汗かあぶらかがにじんでゐた。

「なんなの。」

「それがすんでからでいいんだけれどね。」

「ぢやあ、いますむから茶の間へ行きます。」

「ここの方がいいんだけれど。」

おちかは話の内容を女中や子供たちに聞かれたくはなかつたのである。ひさはそこではじめておちかのいつもと少しちがふ様子に氣がついたらしかつた。ひさはだまつて仕事の手を進めた。おちかは火鉢の側に來て坐り、埋み火を起しなぞしてゐた。ひさは立つてしばらく箪笥の環をかたかたさせてゐたが、やがてこつちへ來ておちかに向ひ合つて坐り、「姉さん、なんなの」といつておちかの顔を見た。「ほかのことぢや、ないんだけど。」とおちかははうつむいたままいつた。爐せんを取つて灰をかきならしながら、低い聲でぽつりぽつりいひだした。長い間心に思つて來たことだが、いざとなつてはいふべき言葉にもつまるのだつた。前おきのやうなことをくどくどいつてなかなか本筋にはいつていかなかつた。うつむいてゐる、白髪をかきあげたうなじが細かつたが、そのあたりからひさは眼を一時（いつとき）もそらさなかつた。おちかは、結局は、金を貸してくれろといふのだ。順吉もおかげで無事に歸つて來たし、いつまでもかうしてお世話になつてゐるわけにはいかぬ、しかしなにぶん順吉はあゝして世間の狹いからだになつたし、世の中も變つてゐるしするからすぐにおいそれと適當な仕事が見つかるわけもない、あれもいろいろと考へてはゐるやうだけれど、——それでそれまでの間が三月になるか、半年になるか、ともかくあたしがなんとかやつていかなくてはならぬ、といつて今べつにまだ何も考へてゐるわけではない、眼がわるくなつて針仕事はだめだし、どつか場末の町で子供相手の駄菓子屋でも燒芋屋でもなんでもやるつもり、いづれ順吉ともゆつくり相談してはみるけれど、何をするにしても差當つてお金だし、二月や三月のゆとりは見ておかなくちやならない、たいへんいひにくいことなんだけれど、——

おちかは口をつぐんで火鉢の火をぢつと見つめた。

「そりや、困るわねえ、姉さん。」

ひさはおちつき拂つて言つた。「困る」といふ言葉の意味がどうとも聞きわけかねるやうな調子であつた。おちかははじめて顔をあげた。

「なにか勘ちがひしてるのねえ、姉さんは。姉さんもここへ來てもうだいぶになるんだから、うちが一體どんなくらしだかたいていわかりさうなものだとおもふんだけど、そりや、門戸だけは大きく張つてゐますけどねえ、なにしろはでな仕事でせう、出る一方で家ンなかにお金なんぞあるもんですか。借金ばかりよ。」ひさはいつの間にか紙卷を取り出して吸つてゐた。おちかの話の最中から用意してゐたらしい言葉の調子だつた。

「そりや、高木さんにいろいろお世話になつたことは忘れはしませんけどね。」高木はおちかの亡夫米吉の姓である。邪推してゐるんだ、とおちかは誤解をとかうとする言葉をさがした。奎吾が一本立ちになる時米吉はかなりの金を都合してやつた。それはそのままに

なつてゐる。それを今さら持ち出すつもりはないと、おちかがいはうとするのをおさへて、「そんなことよりねえ、姉さん」とひさがいひだした。あらたまつた調子である。

「順吉さんの心がけですよ、大事なのは。それが先づ第一ですよ。親の眼から見りや、どうか知りませんけどね、わたしたちの眼から見りや、順吉さんはあれでまだまだちつとも折れてなんかゐやしませんからね。どうですか、あの眼つきや、ものの言ひつぷりは。あれが一體相當の教育ある常識ある人の態度ですかね。あんな風ぢや、まだまだだめ、どこへ出たつて。順吉さんさへまともな人間になりや、何も姉さんが駄菓子屋になるの、燒芋屋になるのつていひださなくたつてすむこつてすよ。あたしたちだつて順吉さんのためにどんなに肩身の狹い思ひをしたり、冷汗をかいたりしてゐるか知れやしない、角袖にはしよつちゆう家ン中をじろじろのぞかれるしさ、外聞のわるいつたらありやしない、甥御さんはどちらへおつとめで、と人に聞かれたつてまさか、牢屋から出て來たばかりです、とも答へられやしないぢやないの。あたしたちはまだいいが、これが武夫の勤めてゐる學校の方へでも聞えて、そんな從兄弟があるつてことが知れて、武夫の今後に何かの差障りでもなきやいいがと、ほんとに氣が氣ぢやありませんよ。」

思ひもかけない方向に話はとめどもなく滑り出して、話をもとへ戻さうとするてがかりをおちかはとらへることができなかつた。

「姉さんがわるいんですよ。今さらこんなことをいつたつてどうにもなりやしないけどね、わたしたちがいつたでせう、順吉さんを學校へなんかあげるのはやめた方がいいつて。物事はなんでも無理つてことはしないもんだ、順吉さんも小學校を出たらすぐわたしたちがすすめたとほり、どつか堅い店にでも入れて實業方面に向けたらよかつたんです。それが上の學校へ行くといふ、そんなら商業か工業へ行つたらいいといふのを中學から大學とそんな身分ちがひの無理をのぞんでさ。はじめつからうまくいくわけはないぢやありませんか。今みたいになるのもみんな……。」

自業自得さ、といひかけてさすがに口をつぐんだ。しかし自分の言葉の調子に乘つてひさの舌はさらに　轉しつづけた。

「順吉さんもほんとに生れかはつてなんでもやる氣なら、そりやわたしたちだつて少しは力になつてあげますよ。なんしろまだまだ苦勞が足りないんだ、しなくてもいい苦勞はしてるけどね。なんでもやつてみたらいいんだ、ちつと世間を知るためにね、保險の外交員でも、萬年筆賣りでも、――場合によつちや土方でもさ。」

「お前、」とおちかがいつた、ひさは自分が呼ばれたのかどうかを一瞬あやしんだ。姉が自分をこのやうに呼ぶ呼びごゑは遠い昔のものである。

「お前、順吉に土方をしろとおいひかえ?」

聲がふるへ、紙のやうに白くなつた頰がいつか濡れてゐた。

月の末に母子はわづかばかりの手　りの荷物をまとめ、その家を出て、下谷初音町のある青物屋の二階に引越して行つた。順吉が學生時代長く住んで記憶に殘つてゐる町である。順吉はあの夜、萬一を豫期して約束の場所になほ二十分ほども待つたが、島田はつひに姿を見せなかつた。家へ歸つて廊下を來ると座敷からひさの甲高いこゑがきこえた。順吉はそこにちよつと立ちどまつた。ひさの相手が母であることはすぐに知れた。順吉は部屋へ歸つて布團を敷き、

薬をのんで横になつた。なかなか寢つかれなかつた。しばらくするとおちかが歸つて來た。順吉が寢てゐるのを見てほつとしたらしく顏を見てゐたが、順吉は眼を閉ぢてゐてあけなかつた。掛布團の裾をなほしなどしてゐたが、間もなく明りを消して自分も寢た。寢返りをうち向うむきになつたかとおもふと、かすかにすすり泣くこゑがきこえてきた。闇のなかに眼をひらいて順吉はそのすすり泣きを聞いてゐた。そのうちに彼の考へはきまつたのである。

青物屋の二階へ移つて少しおちつくと、順吉はかつて彼が嫌惡の念をこめて輕蔑した小説家の高山や、學者の杉村を訪ねた。そして筆の上で何らかの仕事を見つけてくれと賴んだ。彼等は快く彼を迎へた。

「今のやうな時代だ、まア焦らずにじつくり腰をおちつけてやるんだね。」

と、そんなふうにいつて、彼ら自身の喜びであるやうな、當然の歸結に出會つたやうな安堵したいろを見せるのであつた。そしていろいろと心配してくれた。

「君ぐらゐロシア語がたつしやなら仕事はいくらだつてあるよ。——おれもあんときもう少しロシア語をやつときやよかつた。もうドイツ語だけぢや間に合はんからね。」

杉村はさういつて手帳を繰りながら、ある出版屋で彼と落ち合ふ日時をきめるのだつた。きめてから、「ああそれからおれの方の雜誌にもそのうちなんか書いてくれよ。原稿料はお話にならんけどね。」とつけ加へた。

順吉は二階の六疊の窓の下に小さな一閑張の机を据ゑて、粗惡な原稿紙にインクをにじませながらせつせと書いて行つた。おちかが女中なみにもらつてゐた給金のなかから少しづつ溜めて來た金と、順吉が五年間の勞役によつて得た金の殘額とがすべてだつた。それがまだあるうちにどうでも最初の仕事を仕上げてしまはなければならなかつた。はじめ神經が荒れてゐる感じで困つたが、少し書いてゐるうちに、調子づいて來た。久しぶりに開いてみる洋書の紙やインキから來る一種の香氣が彼の神經を鎭めてくれた。活字が快く眼にしみて、耳遠くなつてゐたロシア語のいひまはしがしだいに親しみ深いものになつて來た。それらの言ひ　しのなかには一種の感慨なしには口に出來ぬものがあつた。生活のための戰ひといふ感じも手傳つて彼は元氣に仕事をつづけた。二月の夜の寒氣も苦にはならず、毎晩一時二時までも仕事をした。

しかし、二度目の仕事を引受けて來てそれがまだいくらも進まなかつたある日、彼は突然ペンを投げ出してしまつた。そして二度とそれを取らうとはしなかつた。何もせずに十日近くを過した。

かつて來たものとはまた別個な精神の苦痛がふたたび彼を襲つたのである。第一回目の仕事のほぼ完了まぎはに早くも一つの疑念もしくは不安が彼に來たのであつた。あるときふと、彼の腦裡に、現在さういふ仕事をしてゐる自分といふものの姿がじつにはつきりとした形でうかび上つたのである。それは現在の自分の生活の反省といふやうな時間をかけた經路で來たものではなかつた。實に突然、感じの上で來たのだつた。それだけにまたそれは強く眞實なものだつた。彼は自分によつて書き綴られてゐる紙の上の文字を見た。それらの文字どもは一つの（原文七字缺）てゐた。つぎに彼は現にそれらの文字を書きつらねている自分の手を見た。この手は單に一箇の傳道の機械にすぎぬといふか？　彼の手を離れるやいなやそれら

の言葉は一人歩きをはじめる、手はもはや無關係であり、何等の責任をも負ふものでないといふのであるか？（原文八字缺）と現在の自分との關係を彼は思はないわけにはいかなかつた。かつて高山や杉村に對して向けた疑惑を、今や自分自身に對して向けずにはゐられなかつた。そして彼はふたたび筆を取れぬといふおのれの感情をいつはり誤魔化すことはできなかつた。

殘つた最後の十頁ばかりはまるで駈け足で逃げるやうにして、ともかくもその仕事だけは仕上げて持つて行つて杉村の好意で即座に半金は受取ることができた。しかしかうして杉村や高山らとの接觸の面が深く廣くなるに從つて彼らから示される感情には堪へ切れぬものがあつた。彼らは彼にたいして親切だつた。しかしそれは好意以上もしくは以外のものだつた。彼らは順吉が彼らの生活圈内に入つて來たことを自分たちのために喜んでゐるのだつた。ふたたび行動の世界に戻つて行くかに見えた、そしてそれを見ることは彼らのおそれであつた順吉が自分たちのところへやつて來たときに彼らは安堵した。さうして自分たちの現在について一層の確信を持つた。

「やつぱり君でも、な、」とにやにや笑ひながら肩を叩きに來る感じだつた。それを承知でこつちも調子を合せてゐるやうな自分の姿は見るに堪へなかつた。たがひに馴れ合ひで穢し合つてゐる感じだつた。

彼は自分を支へてゐた平俗な考へが脆くも崩れ去つたことを知つた。飜譯でもやつて食はうと彼は考へた。だが一度落ちたものには、單なる生活の手段と思へたものさへもつめたく顔をそむけるのだつた。自分は一體どこまで押し流されて行くのであらう。

ある日順吉は健康を理由にして二度目に引受けた仕事の斷りを書いた。テキストを出版屋まで送りかへすために郵便局まで行つたその足で團子坂下から肴町へ通ずる道をあるいて行つた。道の途中に昭和堂といふ古本屋があつた。主人は順吉の學生時代からの古い顔なじみで、今度こつちへ移つて來てからも、よく顔をおぼえてゐたので時々立寄つては話してゐた。今も店へはいつて行くと彼は堆く積んだ書物の向うに坐り、一册づつ取つては見返しに鉛筆で何かしるしをつけてゐた。

「まアお掛け。」と親しみ深い顔を向けて座布團を押してよこした。

順吉は積んである書物のなかから手に取つて漫然と繰りひろげて見たりしてゐた。

「左翼の本は賣れなくなつたのかね。」

「あゝだめになつたねえ。固い理論ものはいいが、アジ・プロものはてんでだめだね。」

「をぢさん、此頃でも本郷へ毎晩夜店を出してるの。」

「いや、小僧がゐなくなつたもんで、手が足りないんで、今はやめてるよ。」

「出ようとおもへばいつでも出れるんだね。」

「ああ、そりや。」

「僕を一つあそこに出れるやうにしてくれないかね。」

「何をいつてる。」と笑つて仕事の手をやめ顔をあげたが、意外にまじめな顔にぶつかつて笑ひを消した。ああ、と瞬間にすべてがわかつた氣がした。新聞やその他で始終見聞きしてゐた「赤」の崩れがこんな身近かにもあつたかとちよつと暗い氣持がした。

順吉はもとよりざれ言をいつてゐるのではなかつた。そして事實彼は十日足らずのうちに昭和堂の主人の世話で本郷通りの本屋の夜

店のなかにまじつた。

　飜譯書の印税としてはいつた百圓足らずの金のうち六十圓ほど殘つてゐた。その金をふところに順吉は昭和堂について古本の市場へ行つた。六十圓の金で何ほどの本が買へるものでもない、三流四流どころの「ゴミ市」のなかからいくらかましな書物を選つてどうにか品物を揃へるのほかはない、昭和堂がすべてそれを親切にやつてくれた。「本郷てとこは固い本の客が多いからゴミ市ばかりぢや無理だね。」といつて一流どころの市へも二度ほど連れて行つてくれた。振り手が本を前に口上をいふと競りがはじまる。四方から早口に聲がとんでいかに心をこらしてゐても順吉には聞きとれぬものがあつた。ましてそのなかに自分も割つてはいるなどといふことは今日明日のこととはおもへなかつた。振り手がそれを一々さばいて落し主のところへぽんと投げてよこす。書棚や机の上で眺めるときとは書物といふものがまるで別な感じで眺められた。十五六の小僧が一人大人の間から顔を出して立て續けに早口にいつて二十圓三十圓といふ本を落してゐるのを見ると、敵はないといふ氣がした。買つた本は持ち歸ると、一冊々々レツテルを貼つて、昭和堂に教へられて賣價を記した。ものによつては倍儲かるものがあり、一割しか儲からぬものもあつた。書物の足りない分は、昭和堂が店の本を貸して補充してくれた。古物商の鑑札が下りるまでは昭和堂の店の者といふことにして夜店に出るのであつた。

　三月の末で日中は春の近さが感じられたが日暮れからは急に氣温が下つた。順吉は昔田舍にゐた當時着古した、片方の肘が抜けてしまつてゐる洋服を着、鳥打帽を冠り、板草履をはいて、ビール箱に詰めた本を荷車にのせて本郷の夜店通りまで引いて行つた。指定の場所に本をならべ店の恰好をつくつてゐると、「やあ、早いね、」と昭和堂がにこにこしながらやつて來た。如才なく兩隣りの仲間に順吉を紹介し、何くれとなく氣を配り注意をあたへて行つた。

　學校が休みなのと寒いのとで人通りがまばらで客も少なかつた。客が立つと順吉はわざとその方を見ないやうにしてゐた。客は二三冊本を抜いてパラパラとめくつて見るとすぐに去るやうなものが多かつた。それでも九時半頃までに二三冊金高にして二圓八十錢賣れた。「不景氣だね、やつぱり四月にならなきやね。」隣の男がそんなふうにいつて話しかけて來たりした。ぽつぽつ歸り支度をしてゐるものもある。寒いし、初日ではあるし、彼ももう歸らうと思つてゐると若い男が二人連れで、これを買つてくれとまだ新しいかなり大部な本を一冊持ち込んで來た。順吉は面喰つたが、かねて聞かされてゐた買ひ値の標準を頭のなかに思ひうかべて、一圓二十錢で買ふことにした。

　翌朝、報告かたがた禮を述べに行つて、昭和堂にそれを見せ、買値をいふと、彼は一眼見て「あ、こりや、」といつた。

「これがそれ、れいの數物（見切品）つていふ奴なんだよ。これは昨日、市場へ出たばつかりなんだ。よく話をしておかなかつたのがわるかつたがね、この出版屋のものは注意しなくちやいけないんだ。こいつをごらん。」奥附のところを見るとなるほど青い小さなゴム印が捺してある。「畜生、新米だと見て、引つかけやがつたんだな。」と自分のことのやうに口惜しがつた。

　このやうな生活にはいる以外に道はなかつたか、またこのやうな生活がいつまで續くか、共に順吉自身にもわからぬことであつた。彼はつきつめたところ自分の今後については何らの見透しをもつこ

とができなかつた。彼はまだ生きねばならなかつた。今死んではゐられなかつた。そして生きるからには第一義的な生活において生きたかつた。しかし彼はその道を見失つた。學者にも小説家にも詩人にも繪かきにも俳優にも飜譯家にも、彼らにはみなそれぞれにそのものとしての第一義的な生き方といふものがあらう。高木順吉は最初から（原文二字缺）の人として出發し、その道を進んで來た。そして今彼は轉換せねばならない。しかし新しい道はすぐには來ない。彼は迷へるものの姿である。單に食を得る手段ではなく、積極的に社會に働きかける生活の門は、彼の前にも幾つか開かれてはゐる。彼自身が望みさへするならばそのどれかを人は通してくれるだらう。が、彼は敢てくぐり得ないのだつた。彼は彼の何をもつて社會に相渉らうとするのであるか。彼は杉村や高山なることを欲しなかつた。しかもなほ生きねばならぬとすれば、今のところ結局あらゆる知識的な仕事から手を引いて生きるのほかはない。生活を單に食を得るための手段にしてしまふのほかはない。こんな生活は第何義的生活であらうか。下の下まで墮ち拔いた感じだが、しかもなほそこからふたたび這ひ出し、起き上つて來る時は望めぬものであらうか。望めるとも、望めぬともどつちともいへる。内と外とのあらゆる條件によつてそれはきまることである。ただ彼としてはどのやうな場合にも、自分に納得のできぬ動き方はできない。このやうな消極的な態度によつて、おのれのささやかな眞實を守らうとすることのなかに、彼はかすかな光りを見てゐる。闇のなかに見得る一條の微光である。ここに於て彼はある一つの事に思ひあたり、心の疼くやうな羨望の感にとらへられたのだつた。彼は自分とおなじやうなものでありながら、その歸つて行く先がたとへば村の家であるやうな、生産に根をおき、働く人々と直接結びついた生活にある人々のことを思ひだしたのである。彼等自身が働く人々の一人々々なのである。彼等にあつては道はおのづから開けるだらう。彼等の日常生活そのものが、彼等の傷を癒し、彼等によみがへりの力を與へる。

感動のない無表情な冷淡さで重い足取りで順吉はこのやうな生活を引ずつて行つた。

四月にはいつて、春らしく暖かな日が毎日よく續いた。母子が借りてゐる二階は南にガラス戸が開いて陽が部屋の中ほどまでも射し込むのだつた。その春陽の一ぱいにあたるところに襤褸切れを持ち出して、おちかは一日ぢゆうあれこれといぢくりまはしてゐた。年寄りといふものはみなこのやうな仕事を好むものらしい。着古した着ものやそれをほどいた襤褸切れのなかにこめられた過去の生活の匂ひをなつかしむのであらう。おちかは幸福さうに見えた。心が和むでゐることがその姿からもうかがはれた。順吉と共に住めることがもはやたしかである以上、あとはただ成行きのままと思ひ諦めてゐるのであらう。順吉が夜店商人にまで成つたと知つた時にもおちかはべつに驚かなかつた。不滿もなかつた。日のぬくもりのなかに肩をまるめ、老眼鏡をかけ、おぼつかなげに針を持つ手を動かしながら、遠い昔をおもふもののやうに時々おちかはうたつた。

やまがだ　やまがだ
山で育でだ黒猫コ
抱いだり負(おぼ)たり
飯(まま)食(か)せて
それでも泣げば

チヤペ無理だ　チヤペ無理だ

さういふ母の姿を順吉はぢつと見まもつてゐた。母が心の平和を得てゐることを彼は知つた。彼が子供の頃、母はもつとも機嫌のいい時に限つてこのうたをうたつた。そして叔母の家に母子がゐた期間中、彼は一度もそれを聞かなかつた。彼は滿足してゐる母を見ることを涙して喜んだ。しかしながら何ものにも代へ難く愛する老いた母に、依然として重い軛を感ずることからはつひにまぬがれることができなかつた。この矛盾から逃れて母を見得る日の到來を母の生存中に望むことは不可能であらうか。

日が落ち、街に灯がつきそめて、順吉が車を引いて出なければならぬ時が近づいてゐた。

青空文庫情報

底本：「島木健作作品集　第四巻」創元社
　　1953（昭和28）年9月15日初版発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Nana ohbe
校正：土屋隆
2010年8月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

第一義の道

島木健作

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/